

タイムスケジュール

□第1日：2005.9.18（日）

10:00-12:00 理事会・編集委員会

12:00- 受付（百周年記念館 1F ロビー）

13:30-15:15 フォーラム1（国際会議場）

「コメニウスにおける世界の表象と
教育的提示——図絵・修辞・身体」

15:30-17:15 フォーラム2（国際会議場）

「遺伝学と教育の思想史」

17:30-18:15 総会

教育思想史学会奨励賞表彰式

（国際会議場）

18:30-20:00 懇親会 文理学部内さくら（福松食堂）

□第2日：2005.9.19（月）

9:30- 受付（百周年記念館 1F ロビー）

10:00-11:45 コロキウム（会議室）

「啓蒙「と」教育——その絡みと捻じ
れを考える」

「教育学における優生思想の展開 - 歴
史と展望」

「精神分析と教育——エディプス・コ
ンプレックスをめぐって」

13:30-17:30 シンポジウム（国際会議場）

「国家・グローバル化・教育」

コロキウムの概要は別紙「コロキウム概要」をご覧ください

Forum 1

コメニウスにおける世界の表象と 教育的提示——図絵・修辞・身体

報告：北詰裕子（日本学術振興会特別研究員）

司会：相馬伸一（広島修道大学）

表象の問題は現代に至るまで、近代教育学の中心
的課題とされてきた。すなわち、次世代を担う 子
ども に向けて、教科書に典型的な教育メディアを
通して、どのように有意義な世界連関を取捨選択、
あるいは創出し、いかに再現・提示できるか、とい
う問題である。コメニウス（J.A.Comenius, 1592-1670）
は、事物主義を唱え、それに伴う近代的教授方法論
を展開したことをもって、こうした問題構成の端緒
として位置づけられてきた。しかしこうした位置づ
けは、一定の形式として教育方法を受容し、その再
調整を繰り返すことで各時代に適合した教育を模索
するという立場からの歴史解釈によるものであると
いえよう。

本発表ではまず、『開かれた言語の扉』、『世界図
絵』、『遊戯学校』にみられる彼の教育的提示・伝達
形式を、一七世紀的な文脈（音声文化と印刷文化の
混交、事物と言葉の認識論的布置、身体性とレトリ
ックとの連関）の中で捉え直す。そのことによって、
近代教育学におけるコメニウスの事物主義および教
育方法論の位置づけを問い直す。この作業を通して
最後に、私たちの足場をいをもって規定しているで
あろう教育における表象の問題を再考したい。

Forum 2

遺伝学と教育の思想史

報告：金森修（東京大学）

司会：今井康雄（東京大学）

90年代半ば頃から生殖系列遺伝子改造論が、それ
までの禁忌感を脱ぎ捨てて、正面から論じられるよ
うになってきている。ヒトゲノムが特殊な神聖不可
侵性をもつという考え方はむしろ今後維持するのが
難しくなるので、改造論に向けた倫理的・哲学的・
社会的議論を展開しておく必要はある。もっとも近
年のヒト遺伝学の進展自体からは、昔のセントラル
ドグマをはるかに超えた、遺伝子と蛋白相互の間の
相互作用の存在が浮かび上がってきている。その場
合、単純な切り貼りが、仮にできたとしても、それ
が所期の効果をもたらすとはとうてい考えられない。
だから、単純なデザイナー・チャイルド論は、実現
可能性が低い。にもかかわらず私は、現時点で改造
論に一定の目配りをしておくことは必要だと考えて
いる。絶対音感、記憶力、気質、知性などが遺伝的
要因をもっているという予想は一方でますます強く
なりつつある現在、その種の遺伝的特性についての
設計的介入の是非は、技術的・理論的障壁の存在如
何に関わらず、いまから議論しておくべきだからだ。
ここでは、いくつかの可能的な近未来の改造タイプ
を論じ、その基盤をなすはずの倫理原則とは何か、
を探る。